

趣旨と経過

鶴見 太郎

○早稲田大学史学会・連続講演会

「わたしと歴史学、わたしと考古学」

(於文学芸術院校舎)

第一回 二〇〇八年六月二十三日(月)

往生際の良い日本史

黒田 智(日本史)

古代中国との接点 森 和(東洋史)

マニスクリプトの世界

飯田 洋介(西洋史)

実験考古学の世界 菊地有希子(考古学)

第二回 二〇〇八年六月二十七日(金)

境界・マイノリティ・周縁への／からの

歴史学 檜皮 瑞樹(日本史)

大学で学ぶ現在の歴史学

青木 雅浩(東洋史)

普遍史と西洋中世史…ひとつの入り方

古川 誠之(西洋史)

頭と体で楽しむ考古学

川畑 隼人(考古学)

二〇〇八年度早稲田大学史学会の連続講演会は、六月二三日(月曜)と二十七日(金曜)に行われた。タイトルはここ数年、定番となってきた「わたしと歴史学、わたしと考古学」である。タイトルこそ変わらな

いが、今回も若手研究者による熱のこもった報告が展開された。

末席で拝聴しながら、その「熱」の基軸となっているものは、いったい何なのだろうか、と自問してみた。いうまでもなく、それは自分たちが斯界の最前線に立って、資料調査を行った体験であり、そこで培われた力量への自信であろう。しかもそれはまさに現在進行形である点で、聞く側からすれば、これほど鮮やかに対象を浮き彫りにする報告は、ほかにないといってよい。

歴史学・考古学の場合、調査とはその中にやはり、新しい資料の発見、わずか数行の文字の読みなど、核となる体験がある。当然のことながら、その体験の有無がその

後の研究の質を左右する。今回の講演会を聴いていて、目についたのは、いずれの報告にもそれら「原体験」ともいうべきものが、しっかりと位置づけられていた点である。

これも経験の中からいえることだが、例えば発表の中で数秒しか要しない事柄であっても、実は数ヶ月間の文献・発掘探査やそれに続く文書読解・整理作業の結果、ようやく得ることのできたものであることが多い。これを奥ゆかしく自身の胸の内にしまっておくのもひとつの方法であろうが、逆にそこに到るまでの苦しい道のりを、少し語っておくのも、やがて歴史学・考古学を目指す学生たちにとっては新鮮に映るのではないか。それでこそ、目指す資料や仮説を裏付ける対象に行き当たった時の喜びも、より若い世代に伝わると思われる。なぜ自分がこの世界に足を踏み入れたのかを語るといふ趣旨が今後も連続講演会で基調になるとすれば、研究上の原体験を出発点とし、そのことを分かりやすく述べるこの形式は

踏襲されるべきであろう。

一件、言わずもがなのことであるが、歴史学・考古学の発表においてパワーポイントの操作がすでに必須となっていることをあらためて感じた。機能的かつ効果的に機器を使いこなす発表者の方々を見ながら、それら技術的な素養がまったく欠けている我が身と引き比べて、忸怩たる思いが去らなかったことを付言しておく。

ちょうど新制度との端境期にあることから、これまでと授業編成が若干異なっていることから、運営に携わった方々はどの時間帯に設定するか、大分苦慮されたと仄聞した。時間割が落ち着くまでこれからの数年間は、事前に細かな打ち合わせが必要となろう。末筆ながら、講演会が開催されたそれぞれの時限を空けていただいた先生方のご厚意に感謝したい。

〈第一回〉

往生際の良い日本史

黒田 智

たとえば、中世の日本人は、いつ死にたいと願ったのだろうか。

平安時代から明治時代にいたるまで、日本では往生伝という一連のテキストがつくられてきた。往生伝とは、極楽浄土に往生をとげることができた人々の、その死にざまの記録である。下のグラフは、一二世紀から一八世紀までにつくられた往生伝をもとに、往生した日付けごとの件数を折れ線グラフであらわしたものである。

グラフをみると、中世（一六世紀以前）の往生は、一五日が飛びぬけて多いことがわかる。月別にみると、八月がもっとも多く、二月がこれについている。さらに時刻では「午の正中」という表現が頻出する。つまり、八月（あるいは二月）一五日正午こそが、中世的な往生における理想の日時

であったわけだ。「願わくば花の下にて春死なむその如月の望月の頃」。西行が詠んだように、慢性的な飢餓状態にあった前近代の日本社会では、麦などの畠作物の収穫を待ちきれず、春にもっとも多く死亡して

